

社長室で考えた事 ＜最終回＞ そもそも「会社」って何？



JOI シニアフェロー 藤田 研一
(K-BRIC 代表、前シーメンス株式会社代表取締役社長兼 CEO)

.....

前職でドイツ企業の日本法人代表取締役を務めていました。社内の肩書きは役員・社長・会長と変わったのですが、同社に在籍した15年間で「マネジメント」というテーマは常に考えさせられる事柄でした。それらは外資系への就職希望者向けに「日本人が外資系企業で働くということ」と言う書籍で体系的にまとめさせてもらいました。

一方で、もっと日常的な何故や気付きもいくつかあり、こちらを軽いエッセイとして書いてみました。コーヒープレイクとして軽く読んでいただければ幸いです。

.....

今シリーズでは文化や、組織、マネジメントの違い、はたまた会社は誰のものなのかなど色々と会社について書いてきました。そこでフト思ったのは、「そもそも会社って何？」という素朴な疑問です。そこで日本を中心に色々調べてみました。私の好奇心に少しお付き合いいただければ幸いです。

「会社」と「社会」は漢字が反対になっただけ、だからとても近い存在で、会社は社員にとっては皆が集う一種の社会。これは私がよく使うセリフですが、もう少し真面目に歴史的な流れをみてみると、まずは江戸時代に、鎖国状態での唯一の貿易国、オランダの蘭学書を翻訳する時に「会社」という和製漢語が作られたそうで、当時は「団体」や「集団」といった広い意味もあったそうです。また江戸末期から明治初期までは、「社会」を意味する Society (ソサエティー) の訳語でも使われたそうです。話を「社会」に移すと、Society の訳語は他に「交際」「仲間」「連中」「組」「社中」などがあり、こちら側でも現代の「会社」の意味に近い使われかたがされています。要するに「会社」と「社会」の概念には差がなく「小ぶりの共同体」とか「同類の集団」という位置づけで同じものだったわけです。この使い方は、明治8年に福地源一郎が「ソサエチー・社会(社会)」と東京日日新聞で使うまでは整理されておらず、その後徐々に「会社」と「社会」の使い方が整理されて現代に至るようです(以上「語源由来辞典」より)。話が飛びますが、日本初の商社といわれる坂本龍馬が作った亀山社中も「社会」であり「会社」だったのだと、改めて思いを馳せます。

さてさて、それでは両方の言葉で使われる「社」はどこから来たのか。「會（会）」は「集まる」「会う」「めぐり合う」といった意味ですぐ想像できるのですが、「社」は少し掘り下げて考える必要があるようです。そこでまた登場するのが、昭和の知の巨人である司馬遼太郎先生の名著「この国のかたち」。「会社」「社会」「神社」「結社」「公社」など色々な和製漢語で使われる「社」。遅くとも紀元前 12 世紀の本には、中国での集落単位「里（り）」ごとに「社」という空間（狭い空き地だったようです）があり、そこに里の人々が集まり、神様を祭ったり、五穀の祈りを捧げたりしたらしいです。それが日本に伝わり、後世に発達して立派な神社の社殿などの建物になり、現代に至ります。つまり「社」は人々が集まる（「神聖な」場所）を元々意味していたのですね。

色々調べてみた結論としては、日本人（そして他のアジア諸国）にとっての「会社」や「社会」は、「人々が集う場所」という集合性の高い存在で、そしてその位置付けは、「皆が集まり、何かを決めたり、実施したりする重要な場所」となるのではないのでしょうか。

これに対して、英語を中心に、**Society** と **Company** の元々の意味も考えてみましょう。

先ず **Society**（ソサエティ）ですが、語源はラテン語の **Socialis** で、同じラテン語で「仲間」を意味する **Socius** からの派生だそうです。オックスフォード辞典でも、「友好的で親密な仲間と共にいる連合（アソシエーション）」となっており、元々は上流階級の「仲間の集まり」から生まれ、その後の市民社会の生成で、より広い意味になったようです。

次に **Company**（カンパニー）を見てみると、語源は意外にも古いフランス語で、「ひとつのパンを分け合う仲間、ひとつの目的を共有する集団」という **Compagnon** と同じ語源だそうです。**Com**（一緒）、**Panis**（パン）、**Peh**（養う）がくっついてできた言葉とのこと。ということは、こちらも「仲間」が中心で、「特定目的のために個人が集まり行動すること」そのものを指すのですね（以上、「語源英和辞典」）。なお、普通は小さめの会社や事務所を指す **Firm**（ファーム）という単語もありますが、こちらはラテン語で「取引を堅固にするために文章に署名した屋号」（**Firm** の別の意味は「堅い」です）が元々の語源だそうです。「仲間」よりビジネスに寄った便宜上の存在と取れます。

最後にもう一度語源を整理すると、日本の会社は、皆が集まる「場所」で、そこに集まること、そこにいてお互い話す事で価値が生まれる。それに対して、欧米の **Company** は、「目的の共同体」で、同じ利害や目的を持った人が作る「仲間」で、自分の目的のために便宜上所属する事に意義があります。

やはり、「集团的価値」と「個人の利害共同体」では、その社会的価値や存在意義が異なるようです。外国企業のルールや経営スタイルをコピペしてもなかなか日本企業では定着しない。またその逆も然り。会社の成り立ちから考えると、納得の行く話です。